

## エルサ・ベスコフの絵本研究③

### エルサ・ベスコフの絵本における植物の擬人化

Study on botanical-anthropomorphism in picture books by Elsa Beskow

びやじま  
美谷島いく子

Ikuko BIYAJIMA

#### 1. はじめに

児童文学に登場する動物、乗り物、人形等は、本来の姿ではなく、服を着たり、言葉を話したりして人間のように描かれていることがある。このように、人間以外のものを人間に似せて描くことを「擬人化」という。

絵本においては、動物の擬人化が多く見られる。その他、例えば、乗り物を擬人化した絵本も多い。バージニア・リー・バートン作『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』。また、人形を擬人化した絵本も多い。ウィリアム・ニコルソン作『かしこいビル』。さらに、バージニア・リー・バートン作の『ちいさいおうち』のように一軒の家を擬人化し、主人公とした絵本もある（カバー裏:大きなひな菊の笑い顔図10）。

絵本で植物を擬人化している作家は、動物に比べ そう多くはなく、19世紀末から20世紀初めの世紀末芸術（イギリスや仏のアール・ヌーボーやドイツとオーストリアのユーゲントシュテル）の時代に集中しているように思われる。絵本作家としてWalter Crane（イギリス：1845-1915）、Louis Moe（ノルウェー：1859-1945）、Ottla Adelborg（スウェーデン：1885-1936）、Ernst Kreidolf（スイス：1863-1956）、Sibylle von Olfers（ドイツ：1881-1916）がいる。

#### 2. ベスコフと植物

ベスコフの絵本には、植物や(小)動物がしばしば登場する。又廻りくる季節との出会いと別れを繰り返し描いている。その背景には、スウェーデンには、自然享受権という慣習法があり、人々は森や湖等の自然の中で生きてきた伝統があった。

ベスコフの師であったエレン・ケイ（1844-1926）が1900年に書いた『児童の世紀』の中には「未来の学校」という章があり、「未来の学校はどれも大きな庭園に囲まれ、自然学習はそこで最初の教材を手に入れることができ、美的感覚はそこでその直後の栄養を摂取する。各種の手工や園芸作業を通じて、数学や自然科学の範囲である多くの発見を子どもに自力でやらせることができる。」とある。ベスコフは、このような教育を受けていたと思われる。

ベスコフは、絵本で『ひなたがおの子どもたち』や『いちねんのうた』において畑仕事をしている子どもやリンゴの木や紅葉の樹と対話したり、マロニエの樹でぶらんこ、松かさ投げ、白樺の樹にぶらさがり水遊び、樫の樹にのぼる子どもを描いている。

ベスコフの自伝的要素が強いと言われる絵本『みどりおばさん、ちゃいろおばさん、むらさきおばさん』では、表紙に大きな樫の大木が描かれ、住んでいる家の庭には大きな梨の樹がある。

### 3. エルサ・ベスコフの絵本における植物の擬人化

エルサ・ベスコフ(1874-1953)は、多くの絵本において、植物の擬人化を行っている。どんな種類の植物を、どんな方法で擬人化をしているかを年代順に作品にそって明らかにし、更に同時代の他の絵本作家との比較を加え、エルサ・ベスコフの絵本の特性を考えたい。

1. 1897年 『ちいさな ちいさな おばあちゃん』(図1, 3)  
ゼラニウム(植木鉢に2ヶ所)(図2, 4)
2. 1898年 『おひさまがおかのこどもたち』  
夏至祭の頁で絵の下の左右の角に雛菊(図7)
3. 1901年 『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん』ブルーベリー森の王様(杖)7人の男の子(ブランコ、ヨット、車)、苔桃母さん(眼鏡、ベル)と5人女の子(布きん、器、スプーン)(図58)
4. 1905年 『花のうた』(Jeanna Oterdahlの詩) タンポポ、エゾノ父子草、野バラの女王様、風鈴草、バラ嬢とユリ貴公子、アンズタケの父さん母さん子ども達
5. 1905年 『なきむしぼうや』扉に8個の雛菊(図8)、坊やが家に帰る頁で枠の左上に雛菊、(図9)
6. 1907年 『ウツレと冬の森』(OLLES SKIDFard) 5 Blåsippor葉と花、4つのぼみ(図14)
7. 1908年 『おやゆび姫』(Tummelisa) (H. C. アンデルセン作) チュウリップのめしべの上に、裸の小さな女の子 表紙(図20)と2ページ。比較 市川里美(図22)
8. 1914年 『リーサの庭の花祭り』金鳳花の親子(図17上)、じゃが芋の親子(図17下)、赤蕪の奥さん、はつか大根、にんじん、エンドウの花(図17下)、草原の花の行列(図38): やぐるま草、マーガレット、けし、クローバー、のぼら、冠草、おおあわがえり、カミツレ、やませり、ひるがお、ままこな、ブルーベル、きんぼうげ、さわおぐるま、くわがた草、カーネーション、スイトピー、虫取りなでしこ、のすみれ(図38)、森の花の行列: こちょうらん、リンネ草、ちどり草、野いちご親子、ばいけい草、つまとり草、かたばみ、ブルーベリー、リンゴベリー、はりもみ、から松、とど松、杜松の実、いちやく草。  
つりうき草夫人、てんにんか夫人、ゼラニウムの娘の行列(図5)、あざみ紳士、バラの女王、しゃくやく夫人、ライラックの娘、にんどうの娘、車百合の騎士、けまん草、おだまき、あやめの騎士、雛菊(図25)、はごろも草、豆の花、池と沼の花の行列(図42): あしの紳士、花あし、花いぐさ、わたすげ、カラーの娘たち、ほろむいの花、水大根草、忘れな草、黄睡蓮の親子、沼がやつり、騎士イリス。(図42)  
雑草(センナ、タンポポ、はこべ、のぼろ菊、八重むぐら、なべな小僧、いら草ばあさん)(図51)、冠草(図23)、パンジー夫人と野スマレ(図44)、マロニエ夫人と6人の息子たち(馬、槍)、そら豆夫人等
9. 1916年 “Görans bok” ①松おじさん、樅おじさん、榎おじさん、七竈お姉さん、白樺お姉さん、紅葉お姉さん(図32)、②ラバーバ ③Blåsippor(みすみ草)の母と子ども達Tussilago(ふきたんぼぼ)(図15)、④外国製のネクタイをしたトマト氏、きゅうり氏、眼鏡を持つかぼちゃ氏、パセリ嬢、ディル嬢、サラダ菜嬢、ビート夫人、ホーレン草夫人、黒大根、赤蕪坊や(図47)、⑤真珠の首飾りをした七竈(図33)、⑥ハコ柳、図 ⑦榆、楓、花の子(風鈴草、雛菊、桃色の花)

10. 1920年 『ラッセの庭で』 9月(芦笛)、丸すぐり(図34)、赤房すぐり、黒房すぐり(図35)、えんどう豆、さやえんどう(図48)、林檎夫人(リュート)(図36)、プラムの娘さん(青、黄) 苺(家族)、野苺、梨(図37)、キャベツ夫人、アスター、ダリア、金蓮花、マリーゴールド
11. 1927年 『いちねんのうた』 4月、5月：白樺夫人、一輪草、あま菜、すみれ、からすのえんどう、黄色い桜草、8月：赤房すぐり夫人、はろむい苺、ブルーベリー、苔桃、き苺、赤い実のネックレスをつけた七竈夫人、ねずの実、メロン(図39)
12. 1927年 『おひさまのたまご』 松ぼっくりのコッテ、ねっこじいちゃん
13. 1939年 『どんぐりぼうやのぼうけん』 原題が“Oche, Nutta Och Pillerill”、どんぐり 坊やのオッケとピレリル(いかだ、シャベル、父さん母さん、電話、ティーカップ) はしばみの女の子ヌッタはしばみ夫人と子どもたち、マロニエの子ども、野ばらの精、松かさ夫人、びやくしんの精
14. 1945年 “ABC-resan(ABCの旅)” Bo(男の子)とAnna(女の子)がスウェーデン語の29の文字の文字を旅する絵本の中で、JがJordgubbsmor(苺の母さん)、NがNyponet(Rose Hip)(図29)、PがPaeonet(梨)、RがRosen(バラ)、VがVallman(ケシ)。

このように見てくると、ベスコフは33冊の絵本中、写実的な作品ではなく幻想的な作品14冊に、植物の擬人化が見られた。植物の擬人化は、扉や縁飾りや枠の外等、周辺に見られ、ストーリーの中心部分に移動し、又脇役から主役へと変化することが分かった。

即ち、絵のうちでも重要でない扉や縁飾りで自由な想像力で新しい描き方を試して、作り出していることが分かる。

#### 4. エルサ・ベスコフの植物の擬人化の諸相

##### 植物の擬人法 I 表情を描く

人間は、泣いたり、笑ったり、怒ったり、驚いたりといった表情を他の動物と比べて豊かに表現することが出来る。喜び、悲しみ怒り等の複雑な感情の変化を表情として表現出来るのは、額、眉、瞼、頬、鼻、唇、顎、等の形や配置を変化させることが出来る顔の筋肉の発達にある。植物を自然のままに描いたのでは表情には欠しく人間と植物の交流を豊かに描くことは出来ない。植物の葉や花や幹に、顔を描き、その顔に人間と同じような表情をつけて描くことは、それだけでも擬人化である。

表情は、顔だけでなく、体全体のしぐさ、ポーズでも表現できる。(図23)

1. 『ちいさなちいさなおばあちゃん』においてベスコフは、ストーリーと余り関係の無い扉(植木鉢に顔)や丸い縁飾りに、自由な想像力をはばたかせ、ゼラニウム、(図1, 3)クローバ、白樺、猫柳、松ぼっくりの植物の装飾模様を描いている。

猫がミルクを飲んでしまう場面(15ページ)で、窓際のゼラニウムの植木鉢の2枚の葉に顔が描かれ、目は黒丸、眉間に皺、口はへの字のしかめっ面をして、それを見ている。

(図4)

2. 『おひさまがおかの子どもたち』でベスコフは、長方形の画面にきんぼうげ、ひな菊、たんぼぼ、バラ、睡蓮、クローバ、芥子などの花や、赤蕪、ニンジン、苺、マロニエ、真ぼっくり等の縁飾を付けている。  
夏至の祭りの頁で、縁飾りのひな菊に口を大きく開けて笑った顔(図7)が描かれている。
3. 『なきむしぼうや』において、扉の上4個に悲しい顔のひな菊、下4個に笑い顔のひな菊が描かれている(図8)。より目をして見下ろすひな菊(図9)。
4. 『ウツレと冬の森』において、春の女王様がやってきた場面(図13)で、みすみ草の花に笑い顔が描かれ、春が来た喜びが描かれている(図14)。

#### 植物の擬人法Ⅱ 2本足で立って歩く。

植物は地中に深く根をはっており動けない。(『ねっこぼっこ』の表紙(図60)、根っこじいちゃんは2足歩行しており例外)

「2本足で立って歩く」ことは、植物と人間とを区別する違いである。

ベスコフの絵本中では、植物も直立歩行をするように描かれ、行列して行進したり(図38、39、42、44)踊ったりする(図48)。比較『ねっこぼっこ』では大地の奥のかあさんと根の子どもを描いている。

例：3の3, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13.

直立歩行すると、手が自由に使えるので道具が使える。例として：3の3 杖、眼鏡、ベル、布、布きん、スプーン、ブランコ、ヨット、車、眼鏡、葦笛とリュート

#### 植物の擬人法Ⅲ 言葉を話す、服を着る

人間だけが、言葉を使ってコミュニケーションすることが出来る。服を着るのも人間だけであり、服を着て言葉を話す植物はほとんど人間とかわらない。服や履き物は、どの程度人間化したか示す指標でもある。例として、ベスコフの絵本の中で、植物が言葉を話したり歌を歌う例：3の3, 7, 8, 9, 11, 12 服を着る例：3の3, 4, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14

#### 植物の擬人化Ⅳ 名前を持つ

登場する植物に名前を付ける事は、特別な意味を持つ。ただの松ぼっくり、どんぐりではなく、「コッテ」「オッケ」という名前をつけられた時、それは特別な一個しかない存在となる。「ピレリル」「ヌッタ」

### 5. 他の作家と比較したベスコフの特徴

(エルサ・ベスコフ) 同時代に植物の擬人化した絵本を描いているW.Crane(1845-1915)、Ottila Adelbory(1885-1936)、Ernst Kreidolf(1863-1956)、Sibylle von Olfers(1881-1916) Louis Moe(1859-1945)の絵本との比較により、エルサ・ベスコフの絵本の特性を考えたい。

同時代の絵本との比較

1. Walter. Crane(1845-1915):1889年“Flora’s Feast”. 1901年“A Masque of Days”、1906年“Flowers from Shakespeares Garden”
2. Ottila Adelbory(1885-1936):1893年“Prinsarnes BlomsterAlfabet”
3. Ernst Kreidolf (1863-1956):1898年“Blumen Märchen”. 1901年“Die Schlafenden Bäume”. 1911年“Gartentraum”. 1922年“Alpenblumenmärchen”. 1928年“Bei den Gnomen und Elfen”
4. Sibylle von Olfers(1881-1916):1906年“Mummelchen und Pummelchen”. 1907年“Etwas von den-Wurzelkinder” 1909年“PrinzeBehen in Walde”
5. Louis Moe(1859-1945):1908年“Burre - Busse i Trollskogen”

### 1. 樹木を擬人化した

太い幹に顔を描いたり(図32, 33)、灌木の茂みや太い樹の幹から人間の姿をした樹の精霊が現われる(図34, 35, 36, 37)。(『ラッセの庭』での擬人化の方法) 北欧神話『エッダ』のユグドラシル(トネリコの木)を原型にもつことによる。

2. 草花、野菜を子どもの喜ぶ行列(水平方向の行列(図42)、階段を下る型の行列(図5)、螺旋形の行列(図38))として描く。W. クレーンは、『花の宴』(1889)において、文章では、「長い行列が始まった」となっているが、絵では1頁ごとに1~2種類の花が描かれるのみである(図45)。

S. V. オルファースは、『ねっこぼっこ』(1907年)においては、大地の下の洞窟から幼い女の子たちが自分で縫った花の色と同じ服を着、花を手を持って地上へと、小動物や緑のマントを着た草を手を持った幼い男の子と一緒に、行列して行く様子を描いている(図40)。又、池と沼の花の行列(図42)は、小川のそばの忘れな草が遊んでいる場面と、画面の周りの、花い草の飾り等が似ている(図43)。

比較 [O. アーテボリの行列(図41)、S.V. オルファースの行列(図40)]。

3. 植物の親子(ブルーベリー、苔桃(図58)、アンズタケ、金鳳花(図17上)、ジャガイモ(図17下)、ソラマメ(図48)、みすみ草(図15)、苺、どんぐり)をしばしば描いた。W. クレーンは、恋人同士や戦いを描いた(図26)。

4. 子どもにとって、特別の時(1)母の誕生日、2)夏至祭り、3)秋祭り)に、擬人化した植物と子どもが出会い交流する。例: 3の3、8、10

E. クライドルフでは、羊飼いが通り過ぎるだけ。

5. 植物と小動物をしばしば描くが、植物のみで動物はほとんど擬人化しない。例外として『しりたがりやの小さな魚のお話』や『どんぐりぼうやのぼうけん』のりすのスパン氏、『おひさまのたまご』のりすのクツレがある。(小動物: かたつむり、毛虫、かえる、とかげ、てんとう虫、バッタ、こがねむし、ネズミ、あぶ、蟻)、W. クレーンは、植物を擬人化する中で、動物を描いた。アイリス→2頭の馬(図52)、マリーゴールド→子羊(図53)、百合→2頭の虎(図54)、フランス菊→雄牛(図55)、水仙→猟犬(図56)、西洋さくら草→雌牛の頭と顔のみ(図57)。

E. クライドルフは、アルプスの植物と動物を擬人化した(図18, 46, 49)。

### 6. 終わりに

児童文学(絵本)における擬人化を、単に読者である子どものアニミズムや相貌的知覚のみから生まれたものと考えべきでない。植物の擬人化により、植物は本来持っているものを付与されることになり、擬人化の方法を見ることは、人間と植物とを隔てている違いを見ることでもある。即ち、擬人化された植物は、読者に「人間とはいかなる存在であるか」を伝えているのである。

日本の絵本における植物の擬人化には、ほおづき、とうもろこしの他、次のようなものがあり、ベスコフと比較していきたい。

1. 『ほおづきづくし』(一勇斎国芳) 天保、弘文の頃。
2. 『しん板ほうづきあそび』芳藤、文政から明治の頃
3. 『猿蟹合戦』井川洗厓、講談社(1930年代)
4. 宮沢賢治の童話を絵本にしたもの

ゼラニウム



図 1



図 2



図 3

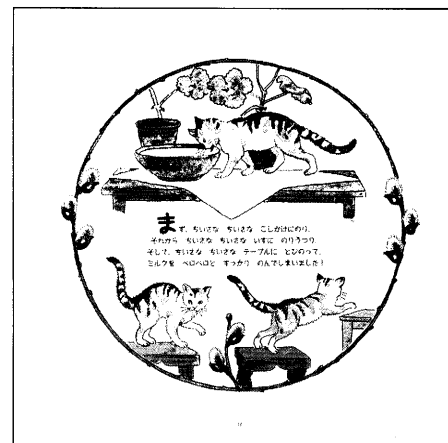


図 4



図 5



図 6

図 1, 2, 3, 4. 『ちいさな ちいさな おばあちゃん』(偕成社)より

図 5. “Blomsterfesten i Täppan” (リーサの庭の花祭り)より

図 6. “Gartentraum”『不思議な杖を持つ騎士』 E. クライドルフより

日本の浮世絵の影響を受けている

ひな菊



図7

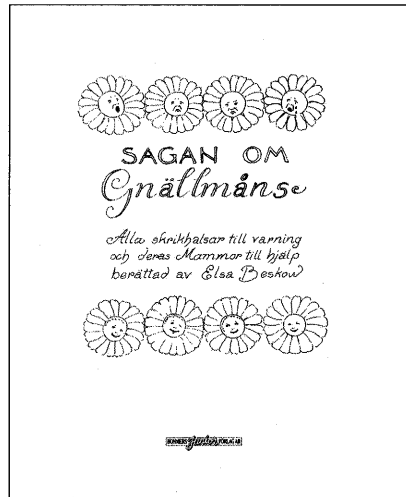


図8



図9

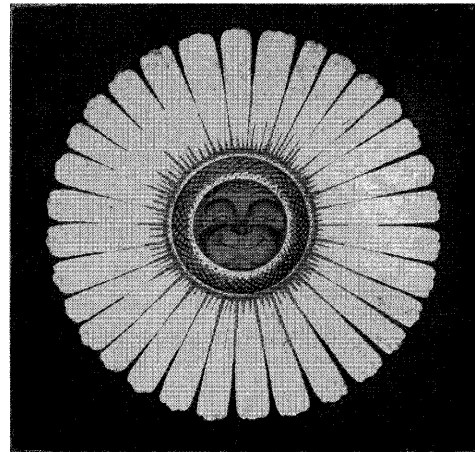


図10

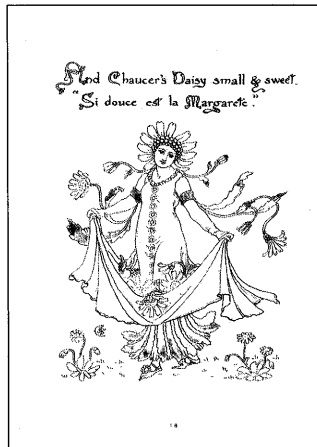


図11



図12

- 図7. “Barnen på Solbacka” (おひさまがおかの子どもたち) より
- 図8, 9. “SAGAN OM Gnällmånse” (なきむしぼうや) より
- 図10. 『ちいさいおうち』カバー V. L. バートン(岩波書店) より
- 図11. “Flora’s Feast” W. クレーン より
- 図12. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリ より

Blåsippa (みすみ草)



図 13



図 14

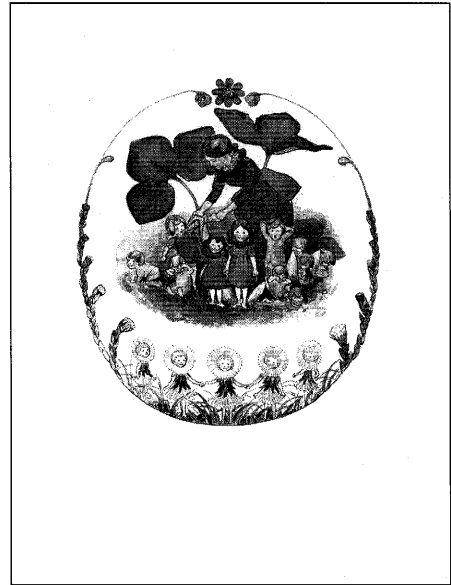


図 15



図 16

きんぽうげ (Buttercup)

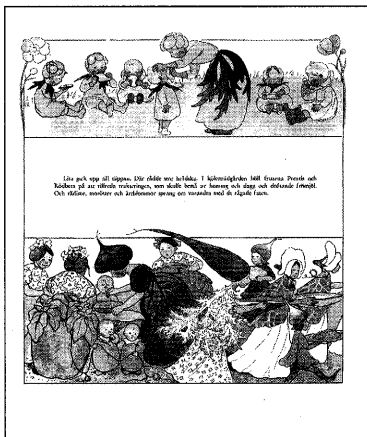


図 17

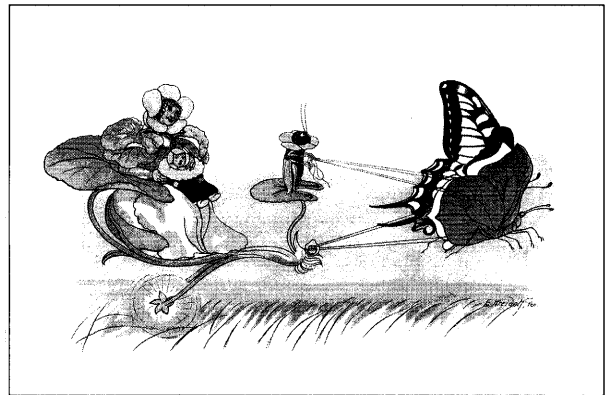


図 18



図 19

図13, 14. 『ウツレと冬の森』(らくだ出版) より

図15. “Görans bok” より

図16. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリより

図17. “Blomsterfesten i Täppan” より

図18. “Blumen Märchen” E. クライドルフより

図19. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリより



チューリップ



図 20



図 22

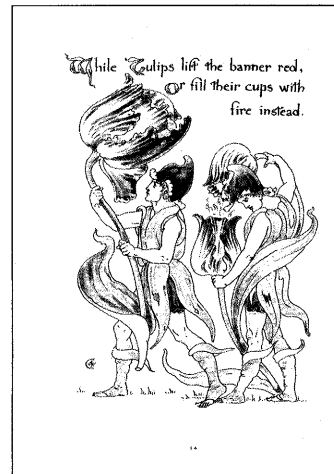


図 21

冠草

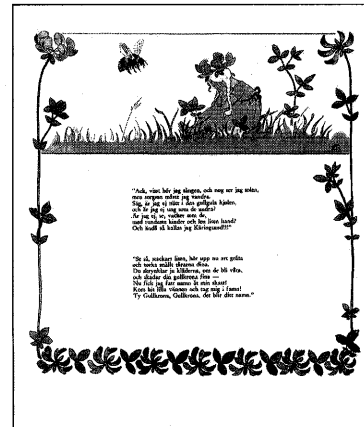


図 23



図 24

図20. 『おやゆびひめ』(フェリシモ出版)

H. C. アンデルセン作より めしべの上に赤ちゃん

図21. “Flora’s Feast” W. クレーンより 花びらから火が出ている

図22. 『イーダちゃんの花』H. C. アンデルセン原作 角野栄子文 市川里美絵(小学館)2004年より おしべ, めしべが顔に、足がない

図23. “Blomsterfrsten i TÄppan” より

図24. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリより

## バラ女王



図 25



図 26



図 27

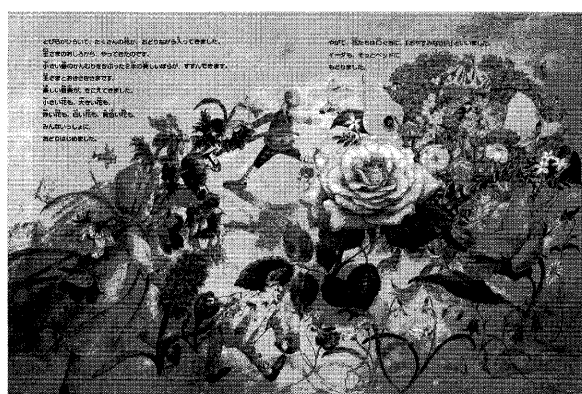


図 28

## Nypon Blomma (rose hip)



図 29



図 30



図 31

- 図25. “Blomsterfesten i Täppan” より
- 図26. “Flora’s Feast” W. クレーンより
- 図27. “Blumen Märchen” E. クライドルフより
- 図28. 『イーダちゃんの花』より
- 図29. “A B C resan” より
- 図30. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリより
- 図31. “Flora’s Feast” W. クレーンより

樹木

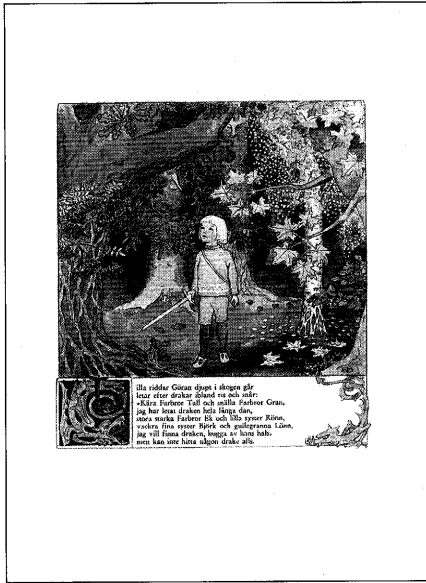


図 32

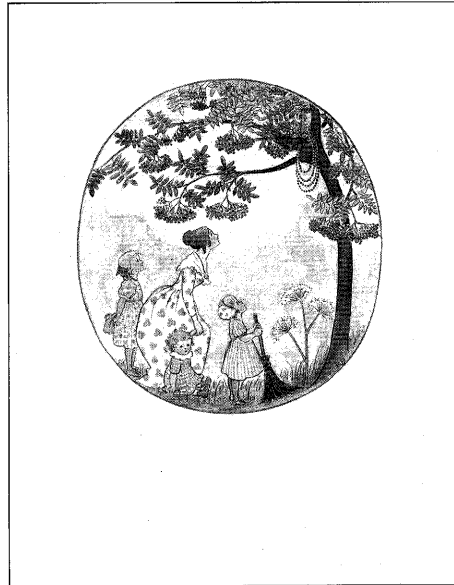


図 33

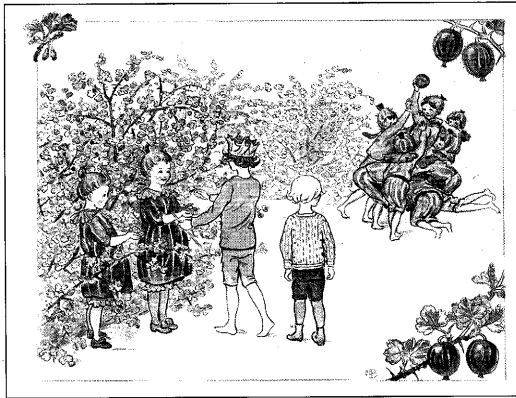


図 34

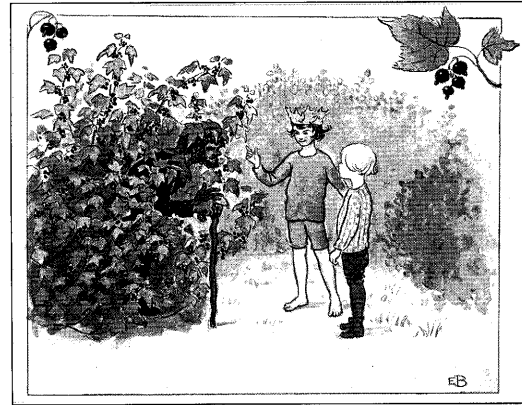


図 35



図 36

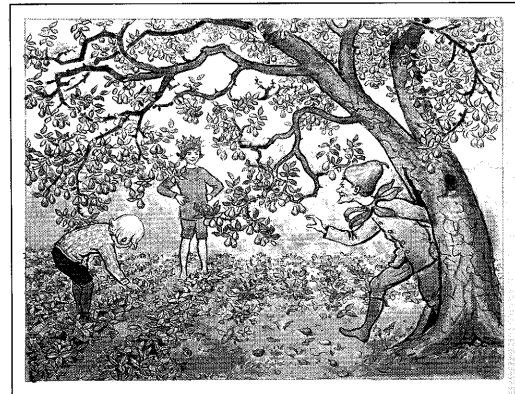


図 37

図32, 33. “Görans bok” より

図34, 35, 36, 37. 『ラッセの庭で』(徳間書店) より

行列



図 38

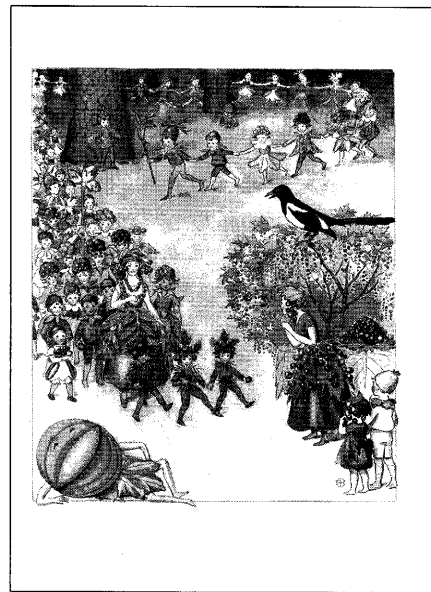


図 39



図 40

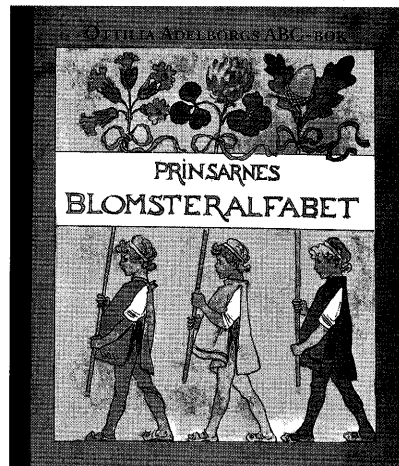


図 41

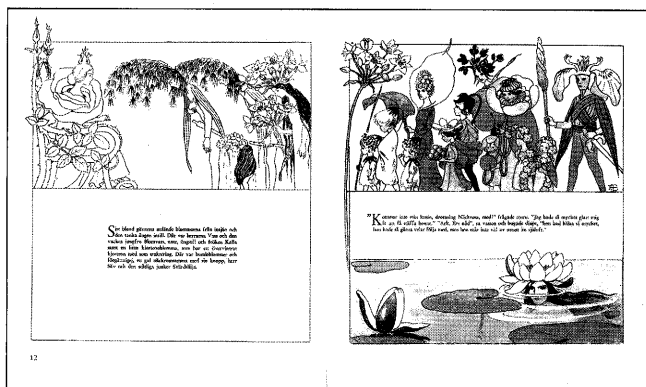


図 42



図 43

図38. 『リーサの庭の花祭り』より

図39. “Årets Saga” (いちねんのうた) 8月 より

図40, 43. 『ねっこぼっこ』(福武書店) S.V.オルファースより

図41. “Prinsarnes Blomster Alfabet” O. アーテボリ 表紙より

図42. “Blomsterfesten i Tjappan” より



W. クレーン

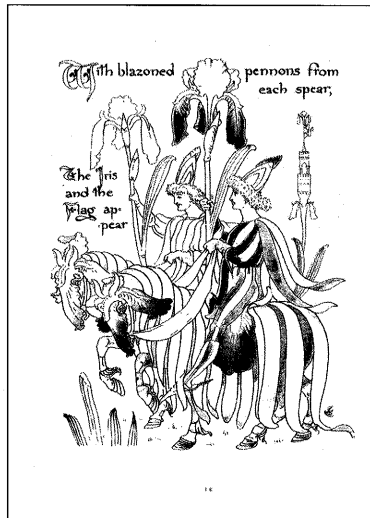


図 52



図 53

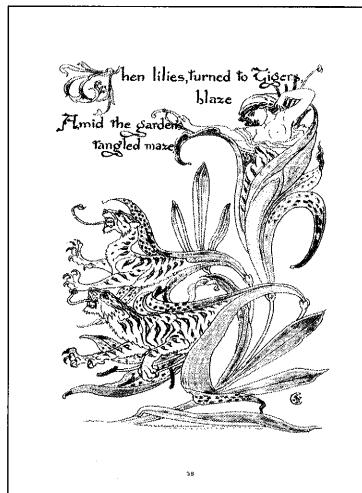


図 54

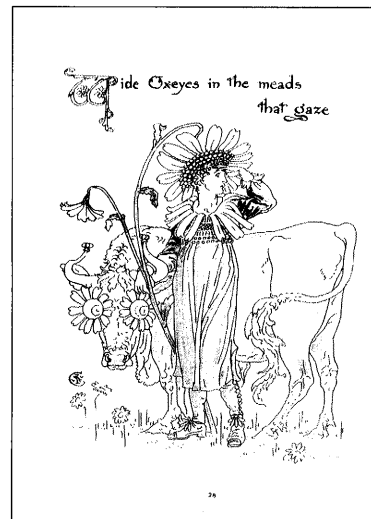


図 55

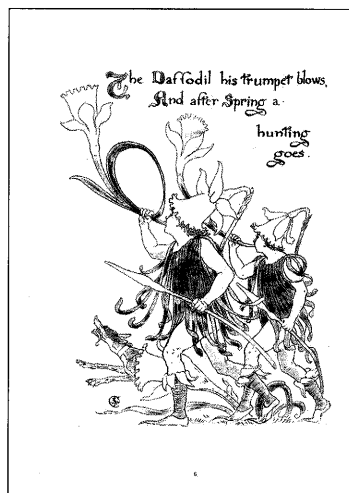


図 56

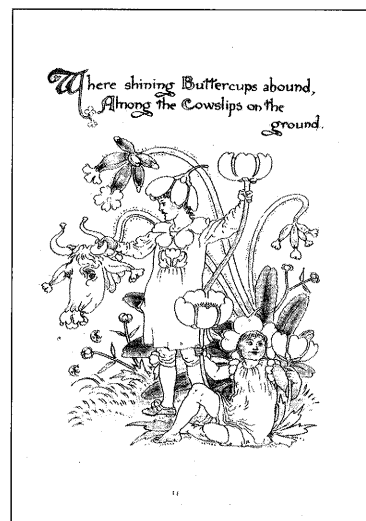


図 57

図52～57. “Flora’s Feast” W. クレーンより

図52. 『赤い鳥』 創刊号の表紙 清水良雄 絵「お馬の飾」(石版刷)のもとになったと言われる

道具を使う



図 58

樹木

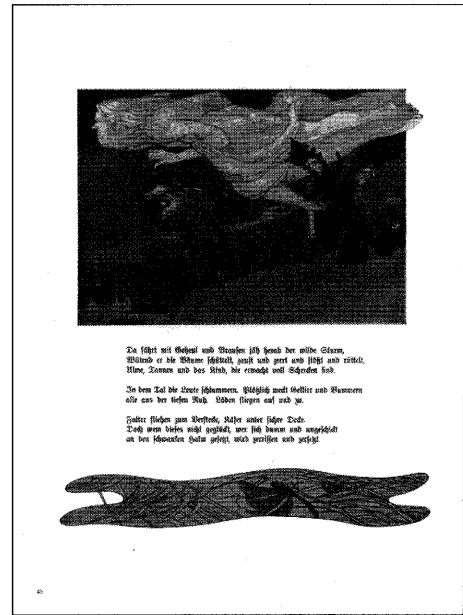


図 59



図 60



図 61

- 図58. 『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん』（福音館）より
- 図59. “Die Schlafenden Bäume”（ねむれる木）E.クライドルフより 楡ともみ
- 図60. 『ねっこぼっこ』（福武書店）S.V.オルファースより 表紙
- 図61. 『ブッレブッセとまほうのもり』（“Burre-Busse i Trollskogen”）（徳間書店）シールス・グラネール文、L. モー絵より

参考文献

- (1) “Elsa Beskow En BIOGAFI”、Stina Hammar Albert Bonniers Förlag1958
- (2) 『動物絵本をめぐる冒険』矢野智司 勁草書房 2002年
- (3) 『浮世絵と子どもたち』東武美術館、1994年
- (4) 『落穂拾い』下巻 瀬田貞二 福音館 1982年
- (5) 『世紀末のイラストレーターたち』海野弘 美術出版 1976年
- (6) 『エルンスト・クライドルフの世界より』2002年 小さな絵本美術館